

## 北部九州の中山間地におけるソバの2期作栽培

田中 靖・牧山繁生<sup>1)</sup>・天本真登<sup>2)</sup>(佐賀県農業試験研究センター・<sup>1)</sup> 佐賀県農業試験研究センター三瀬分場・<sup>2)</sup> 三神農業改良普及センター)Yasushi Tanaka, Sigeo Makiyama, and Makoto Amamoto :  
Double cropping of buckwheat in highland area of Northkyusyu

北部九州の中山間地における転作作物は、作柄が不安定で、収益性が低く、定着が難しい。そのため、遊休地が増加し、水田の利用率が年々低下している。そこで、地域特産品として需要が高く、土地利用型作物として栽培も容易なソバの新作型(夏ソバ)の開発および省力栽培について検討した。

## 1. 材料および方法

試験は1999年から2002年の4か年、佐賀県農業試験研究センター三瀬分場(標高400m)内の花崗岩系砂壤土圃場で行った。

試験1：夏ソバの北部九州における適応性試験

供試品種は「キタユキノバ」, 「キタワセソバ」他5品種・系統を供試し、播種期は、4月上旬から5月中旬にかけて旬別に5水準を設けた。

試験2：秋ソバの機械化省力安定栽培試験

供試品種は在来品種を用い、4条播きドリルシーダーで播種した場合の播種量、播種期および播種畦の高さについて検討した。

試験3：従来の草刈り機と大豆コンバイン(大豆・ソバ用)による収穫作業時間の比較を行った。

## 2. 結果および考察

試験1：北部九州における夏ソバの品種は、北海道の品種である「キタワセソバ」が最も収量が高く安定した。播種期は、4月上旬播種では、年により遅霜の影響を受け、苗立ち数が減少し、収量も低下した。5月播種では、収穫期に梅雨の影響を受け、着粒数が減少し低収となった。このことから、北部九州における夏ソバの播種適期は、4月中旬から下旬で、ほぼ100kg/10a以上の収量を確保でき、安定することが明らかとなった。

試験2：秋ソバの収量は8月下旬播種では、秋雨や台風の影響を受け不安定で、8月上旬から中旬播種が収量が安定した。播種量は、6kg/10aで、着粒数が増加し、収量は高くなった。また、畦の高さの違いでは、高畦することで排水性を良くなり、出芽率が高く、着粒数も多く、収量は高くなった。

試験3：収穫時に大豆コンバイン(大豆・ソバ用)を使用することで、従来の草刈り機体系に比べ収穫・脱粒作業を約1/40と大幅に短縮できた。

以上のことから、北部九州の中山間地では、夏ソバと秋ソバを組み合わせることで、ソバの2期作が可能である。また、収穫作業は、大豆コンバイン(大豆・ソバ用)を用いることで、大幅に省力化できることが明らかになった。

今後は、付加価値を付けるための加工技術の検討と、ソバ面積拡大のための機械化(特に播種機および収穫機)の整備が必要である。

第1表 秋ソバの畦高別生育・収量調査

試験区	出芽数 (本/m <sup>2</sup> )	主茎長 (cm)	節数 (節)	分枝数 (本)	稔実粒数 (個/本)	子実重 (kg/a(%))	倒伏 (程度)
高畦区(22cm)	97	79.0	8.1	2.3	60.4	13.0(107)	無
低畦区(11cm)	84	73.8	7.8	2.3	47.5	12.1(100)	無

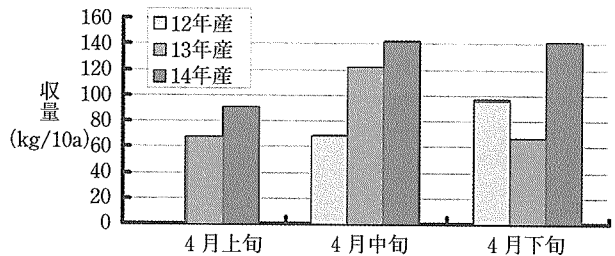
注) a) 品種：在来種。

b) 倒伏程度：無, 小, 多, 甚の4段階評価。

c) 栽培法：播種期8月16日, 施肥量N: 2kg/10a, 播種量6kg/10a。

第2表 コンバイン体系と草刈り機体系における作業時間の比較

作業	作業機	作業時間(分/10a)	
		コンバイン体系	草刈り機体系
耕起	トラクタ	25分	25分
播種	ロータリーシーダー	38分×2人	38分×2人
収穫	大豆ソバコンバイン	16分×2人	
	草刈り機・人力		180分×3人
脱穀	大豆脱粒機		240分×3人
のべ作業時間		2時間13分	22時間41分



第1図「キタワセソバ」の播種期別収量

夏ソバ				秋ソバ		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
○	△	●	○	△	○	●
○	△	●	○	△	○	●

第2図 ソバの2期作

注) a) 品種：夏ソバは「キタワセソバ」。秋ソバは在来種。

b) ○：播種期, △：出芽期, ◎：開花期, ●：収穫期。